

佐藤浩一

第三風景

Koichi SATO:
Third Landscape

佐藤浩一 第三風景

2019年4月6日(土)～
9月23日(月・祝)

人間と植物の境界を静かに見つめる注目の若手、佐藤浩一の個展

展覧会名	佐藤浩一 第三風景
会期	2019年4月6日(土)～9月23日(月・祝)
開場時間	10:00～18:00(金・土曜日は20:00まで)
休場日	月曜日(ただし4月29日、5月6日、7月15日、8月12日、9月16日、9月23日は開場)、 5月7日(火)、7月16日(火)、9月17日(火)
会場	金沢21世紀美術館 デザインギャラリー
料金	無料
お問合せ	金沢21世紀美術館 TEL076-220-2800
主催	金沢21世紀美術館[公益財団法人金沢芸術創造財団]
協力	KUMU 金沢、高砂香料工業株式会社、株式会社中川ケミカル

本資料に関するお問合せ

金沢21世紀美術館
事業担当: 立花由美子 広報担当: 落合博晃、石川聡子
〒920-8509 金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814 FAX 076-220-2802
<http://www.kanazawa21.jp> E-mail: press@kanazawa21.jp

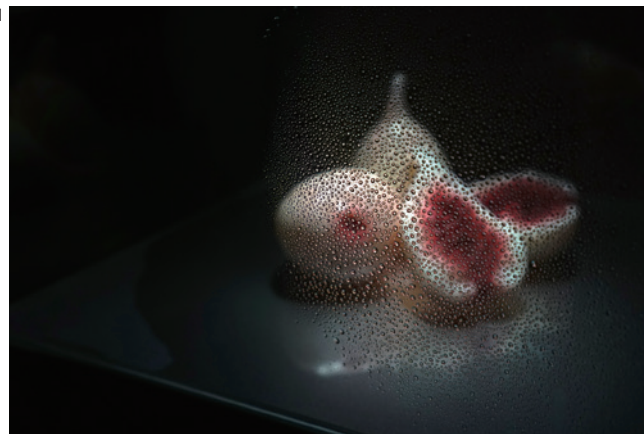


展覧会について

この度金沢21世紀美術館は、今日でもなお視覚中心的作品が多数を占める中、視覚のみならず、非視覚的な感覚、聴覚・嗅覚をも揺さぶる新たな表現を取り上げ、美術館活動の次なる可能性を探求する展覧会を開催します。こうした特徴的な表現を、これまでlab.シリーズなど数々の実験的な取り組みを紹介してきたデザインギャラリーで取り上げます。

佐藤浩一（1990-）は、人類学や植物学への関心から、これまで様々な境界線を曖昧に揺れ動く存在の可能性を考察してきました。「わたし」と「わたしならざるもの」の合間にある、見えないけれど確実にあるその境界を問い、これらの存在がその間で揺れ動きながら共生するこれからの、映像やインスタレーションのみならず、音や香りといった非視覚的なメディアをも複合的に組み合わせながら表出しています。

本展のタイトル「第三風景」は、風景の進化を自然のみに委ねた空間を指し示すフランスを代表する庭師ジル・クレマンが提唱した概念で、都市の空き地や農村の放棄地・国境地帯など、人間が顧みない、あるいは抑圧している場所を、あえて生物多様性を受け入れられる特権的な場として積極的に評価した言葉です。様々な要素が複雑に混在し得る第三風景は、これからの私たちの社会における、人と植物の関係性の在り方に示唆を与えるものであるといえるかもしれません。本展はこの象徴的な言葉を起点に、イチジクの生殖^{ふかん}をテーマとした「Mutant Variations」、人工湖をテーマとした新作を含めて、佐藤浩一の現在地を俯瞰します。



1
【Ficus Brutalia】(部分) 2018
© SATO Koichi

作家プロフィール

佐藤浩一（さとう こういち）

1990年東京生まれ、2019年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了、現在東京在住。

主な個展に「Crepuscular Gardens / 半開花の庭」(Shiseido Gallery、東京 / 2018年)、主なグループ展に「複雑なトポグラフィー—庭園」(栗林公園、香川 / 2015年)。主な受賞に第12回資生堂art egg入賞(2018年)、東京藝術大学 ARTの力賞(2019年)、東京藝術大学 杜賞(2019年)など。



作家ステートメント

[1]

私は壁に囲まれた広い庭園の中にいる。この庭園はとてもよく管理されていて、寸分の狂いもなく刈り込まれたマツやツツジ、たわわに実をつける様々な果樹があり、花々が目を楽しませない季節はない。(ここに季節はない。)壁は雲に届きそうなほどに高いので、葉や花につくいかなる虫もここへは入ってこれないし、鳥や獣が果実を喰い荒らすこともない。

[2]

けれどもこの安寧はもう長くは続かないかもしれない。このところ、壁の向こうからは、何かが崩落するような不気味な音がたびたび聴こえてくるようになった。低い地響きは唸りをあげて、庭園を囲む壁をも揺らしている。ここを管理する人びとは口々に、異民族が攻めてくるとか、壁が倒れたら獣に喰われてしまうとかが、あるいは壁の中にもう一つ壁を作れば大丈夫だとか、そのようなことを話していて穏やかではない。

[3]

まもなく壁の外側にあるものとの接触によって、庭園の秩序は乱されるだろう。しかし私は、壁の崩壊を必ずしも否定的には捉えない。私たちの秩序の荒廃は、「私たちならざる」秩序や主観性の復権でもある。人間的なるもの後退によって浮かび上がる優美さ、官能、愛を、私は見てみたい。昼でも夜でもない鉛色の園地、液状化する冷たいフィールド。獣のような、あるいは植物のような姿へと変貌を遂げた私たちが、すべるように地を這う様を想像してみる。



3 「資生堂ギャラリー 第12回shiseido art egg 佐藤浩一展」
撮影：加藤健



4 「資生堂ギャラリー 第12回shiseido art egg 佐藤浩一展」
撮影：加藤健

展覧会の特徴

境界線上にある人間と植物の関係を見つめる

佐藤はこれまで、人類学や植物学への関心から、様々な境界線上を曖昧に揺れ動く存在の可能性を考察してきました。本展ではイチジク、新作の人工湖というモチーフを通じて、人間と植物の境界を見つめます。境界を規定され、届かなくなった植物の声なき声に耳を傾け、その声を作品を通して表出します。境界上で揺れ動く二元的な存在へのまなざしは、これまでの人間中心主義とも言える在り方から、人も自然も互いに尊重しながら共存することのできる新たな有り様を問いかけるかのようです。



5
《Breeding Institution II》(部分) 2018
© SATO Koichi

「第三風景」から考える私たちのこれから

本展で起点となるのは、フランスの著名な庭師ジル・クレマンが見いだした、人間から見捨てられながらも、多様な生物を受け入れ独自の進歩を遂げた「第三風景」。様々な要素が複雑に混在し得るこの世界は、これからの私たちの社会における、人と人ならざるものの関係性の在り方に示唆を与えるものであるといえるかもしれません。本展ではこの言葉を起点に、近年の佐藤の関心を展開します。

**「音」と「香り」をもメディウムとして取り入れた、
新たな表現を試みる実験的なインスタレーション**

佐藤は「音」や「香り」といった非視覚的なメディアを複合的に組み合わせ、異なる存在をつなぎあわせるメディウムとして用いています。今日でもなお美術界を見渡してみると視覚偏重の作品が多い中、視覚だけではたどり着けない作品を制作しています。視覚のみならず、来館者の聴覚と嗅覚をも刺激する新たな表現を紹介することで、美術館における新たな表現の可能性を探る実験的な場を創出します。

活躍目覚ましい若手注目作家、「人工湖」をテーマに新作を発表

20代ながら2018年に第12回資生堂art egg賞を受賞するなど、佐藤は若手の登竜門とされる展覧会で近年数多く評価されています。本展覧会では、art eggを受賞し注目を集めた作品をはじめ、今回の個展のために制作された人工湖をテーマにした新作を発表。6か月の会期を通じて、佐藤の表現の現在地に迫ります。

関連プログラム

アーティスト・トーク「佐藤浩一 第三風景」

佐藤浩一が作品の前で自らの作品について語ります。

日時：2019年4月6日（土）14:00～15:00

場所：金沢21世紀美術館 デザインギャラリー

料金：無料

協カプログラム

佐藤浩一 トーク

展覧会の一足先に、作家自ら作品と制作活動について語ります。

日時：2019年4月5日（金）18:00-19:00

場所：KUMU 金沢（石川県金沢市上堤町2-40）

料金：無料

広報用画像

画像1～7を広報用にご提供いたします。ご希望の方は下記をお読みの上、広報室へお申し込みください。

画像お申し込みフォーム ▶ https://www.kanazawa21.jp/form/press_image/

[使用条件]

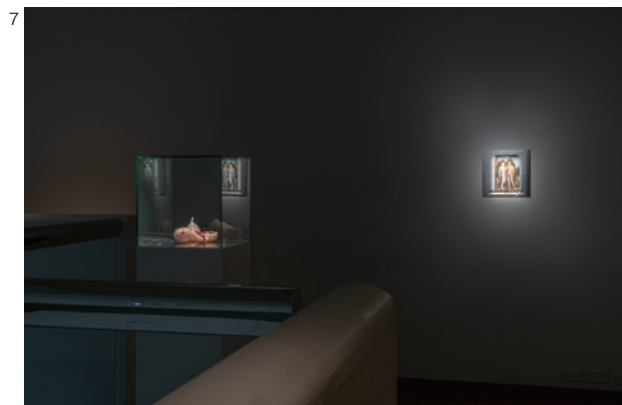
※トリミングをご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報室へお送りください。

※アーカイブのため、後日、掲載誌（紙）、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。以上、ご理解・ご協力のほど、何とぞよろしくお願いいたします。



6 「資生堂ギャラリー 第12回shiseido art egg 佐藤浩一展」
撮影：加藤健



7 「資生堂ギャラリー 第12回shiseido art egg 佐藤浩一展」
撮影：加藤健